

英語教育を取り巻く「神話」について考える

「CROWN」シリーズ代表著者
慶應義塾大学 霜崎 實

はじめに

昨年暮れの押し迫ったころ、編集部の田村優光さんから原稿執筆依頼が届きました。「長年、英語教科書の編集に携わってきた経験をもとに、日本の“英語教育省”の大臣になったつもりで、独自の英語教育論を書いてほしい」という依頼内容でした。

以降、このテーマがときどき脳裏をよぎることがあったのですが、「大臣」経験のない私は論点を絞ることができないまま、時間だけが無為に過ぎてしまいました。付け焼刃的な英語教育論を開陳することは本意ではありません。そこで、本稿では、英語教育に関するまとまった論考を試みることは諦めて、自由な観点から英語教育の在り方について考えてみたい。そんな思いから、英語教育を取り巻くさまざまな「神話」（一見、正論のように見えるが、実は根拠の薄い思い込み）を想定し、それに対して思いつくままに私見を述べていきたいと思えます。

英語教育に関する「神話」を見直すことで、英語教育に対して新たな展望を与える契機になるのではないかと。知らず知らずのうちに私たちの思考や行動を規制している「神話」から解放されることで、より創造的な英語教育の構築に向けて新たな一歩を踏み出すことができるのではないかと。思うのです。

一神話①：「外国語としての英語を学ぶ必要のない英語母語話者は、不当に優位な立場に置かれている」

英語を使えることが当然のようなグローバル化した現代は、英語を苦手とする学習者にとって、住みにくい世の中だと感じるかもしれません。英語圏に生まれ育った場合、世界共通語（lingua franca）のひとつとしての英語を容易に習得できる一方、日本で生まれ育った場合、日本語のほかに、外国語として

の英語習得に膨大な時間と労力を強いられるのは、不公平のようにも思われます。確かに、日本人が英語圏を旅行する場合、英語で意思疎通することが当たり前とされるのに対して、逆に英語の母語話者（以下、N.S.）は、日本でも英語が通じるという前提で旅行できるわけですから、一種の不公平感は否めません。しかし、発想を転換してみることもできるのではないのでしょうか。母語のほかに外国語を身につけることで、自分の言語や文化を相対化し、世界を複眼的に見ることが可能になります。新しい言語を身につけることは、世界を新しい窓を通して見ることもあります。英語を学ぶことは、自分の世界観を広げるために、きわめて重要な役割を果たしているのです。最近の認知心理学の研究においても、二言語併用者の認知能力（とりわけ共感能力）は、一言語の話者と比較して、より優れているということが実証されつつあるようです。このように考えると、日本人の英語学習者は英語のN.S.に対して、逆に優位な立場に立っているとみることもできるのではないのでしょうか。

一神話②：「英語を学ぶには特別な才能が必要だ」

Aさんは数カ国語をマスターしているので語学の才能がある、といった文脈で「語学の才能」という言葉が使われることがあります。しかし、ヨーロッパのような地理的環境において複数言語を習得することは、決して珍しいことではありません。日本人が語学を苦手とする傾向があるとすれば、それには環境的な要因が働いていると見るべきでしょう。考えてみれば、人間は誰も言語習得の才能を持っています。幼児期において、私たちはものの数年間で母語を習得したではありませんか。もちろん母語の習得と外国語学習とは、さまざまな条件が異なりますが、英語学習の成功・不成功を、あまり根拠が

あるとも思えない「特別な才能」の有無に帰してしまうことはできません。そもそも「特別な才能」を前提とする限り、日本における英語教育は成立しない、といっても過言ではないでしょう。

一神話③：「英語教育の基本は読むことよりも、話すことにある」

母語習得モデルに基づいて、外国語習得についてさまざまな言説が作られることがあります。例えば、幼児は早い段階で「話す」ことを始めるので、英語教育においても「話す」ことから始めなければならない、というのがその一例です。確かに、英語の発音も分からずに、読むことはできませんから、その意味で、この説には一理あると言えるでしょう。しかし、小学校の英語教育はともかくとして、中学・高校での英語教育において、あくまでも「話す」ことの優位性に基づいて教授法を設計するのは、あまり現実的だとは思えません。基本となる4技能は、相互に関連していますので、それらを独立させて学習の順序付けをすることにどれほど意味があるのでしょうか。

事実、「読む」能力は、「話す」能力と密接に関係しているように思えます。読解力の養成は、幅広いテーマについての背景的な知識を得るために必要です。そうした背景的知識があれば、当該のテーマについて意味のあることを口頭で伝えることにつながるでしょう。また、「音読」することは、英語の思考回路を身につけることに通じており、それは「話す」能力にもつながっていくはずなのです。「話す」ためには、会話独特の表現や、場面に即した表現などを身につける必要がありますが、場面に応じて当意即妙に対応するためには、そもそも英語の思考回路が内在化されていることが前提になります。日本における英語教育の場合、「読む」ことは、「話す」ことを支える重要な能力だと言ってもよいでしょう。

一神話④：「読解の訓練のためには、難解な文章を文法訳読方式で学ぶことが一番だ」

伝統的な訳読式の英語教育においては、難解な英語の文章を一文ずつ取り上げて、文法構造について微に入り細にわたる説明することが行われてきました。あたかも謎解きをするように、構文の解説と意味解釈をするのが、英語を学ぶ本道のように思われ

ていた時代があったことは事実です。現在でも一部の学校においては読解中心の授業が存続しているものと想定されます。あたかも数学の難問を解く場合のように、英文は難解であれば難解であるほどよい、という考え方がその基底にあるようです。なるほど、このような英文の読解に取り組むことは、ある種の知的訓練になりますし、学習者にとっても、「謎」が解けたときの知的喜びは決して小さなものではないのかもしれませんが、しかし、「英語コミュニケーション」においては、学習者に身の丈にあった教材を提供したほうがよいのではないかと考えています。学習者の興味・関心に訴える教材を取り上げ、学習者は自らの経験や背景的知識を総動員して内容理解に取り組む。このほうが、はるかに大きな教育効果があると考えます。そのためには、英文の読解を取り上げるにしても、単なる文法訳読に陥ることなく、よりinteractiveな方法を模索・推進する必要があるものと思います。

一神話⑤：「英語は暗記科目だ」

受験勉強との関連で、「歴史」や「英語」は暗記科目だと決めつけられるようですが、果たしてそうでしょうか。もちろん、どんな科目にしても、記憶に留めなければならない要素が皆無という科目はないでしょう。英語学習に際して、数千の単語を習得し、さまざまな文法的知識を身につけるためには、それなりの記憶の負担があることは事実です。しかし、暗記だけで英語の力がつくわけではありません。英語と日本語訳を関連づけて暗記するだけでは、英語を使いこなす能力を身につけることはできません。その語が、どのようなコンテキストで、どのような意味合いで使われるのかを、多くの用例を通じて内在化することが必要になります。表層的な暗記だけでは、英語の上達はおぼつかないでしょう。また、最終的には、まとまった英文を読み込み、解釈し、自分の意見を表明するところまでを英語学習の射程に入れて考えたとき、単なる暗記だけでは不十分であることは一目瞭然でしょう。

一神話⑥：「英語コミュニケーション」は受験勉強には役に立たない」

「英語コミュニケーション」の教科書ばかりやっても、受験英語の役には立たない、という意見が



あります。どうも、教科書はおしなべて受験には直結しないという思い込みから、教科書を軽視する考え方です。私が教科書編纂に関係していることから、少しは教科書鼻眞になっているとしても、「受験英語」と「教科書英語」を背反するものとして捉える根拠は弱いのではないかと考えます。そもそも、「イギリス英語」や「アメリカ英語」があるという意味で、「受験英語」や「教科書英語」といった異なったタイプの英語があるわけではありません。一般論ですが、教科書の英語ほどよく吟味された英文はありません。教科書だけで充分という意見に与するものではありませんが、教科書を最大限に活用することで、英語の基礎を固めることができることは確かなのです。その上で、教科書で扱われているテーマについて興味・関心が湧いたとすれば、そのテーマについて、例えばインターネットを活用して、様々なホームページに掲載されている英文やプレゼンテーションなどに接することも大切でしょう。要は、教科書の潜在力を十分に活用する想像力と積極性が必要だと考えます。「教科書英語」と規定することで、その潜在力の活用を自ら放棄するのももったいないことだろうと思いますが、いかがでしょうか。

一神話⑦：「パターン・プラクティスは百害あって一利なしだ」

1960年代から1970年代の初めにかけて、いわゆる<パターン・プラクティス>が大流行だった時代があります。この教授法が放棄されたのには、いわゆる行動主義心理学に基づいた教授法から、コミュニケーションアプローチへの切り替えが進行したという事情があります。現在では、はるか歴史の彼方に埋もれてしまったわけですが、本当に、この教授法は完全に放棄されるべきものだったのでしょうか。実は私が大学生だった1970年代の初めには、まだこの教授法を積極的に実践されている先生がいらっしゃって、実際にこの教授法を体験した記憶があります。この教授法が万能だと主張したいわけではありませんが、英語とは統語構造や表現の型を異にする日本語を母語とする英語学習者にとって、その有効性は現在でも失われていないものと考えます。英語の構造を内在化させるためには、英語の表現の型を徹底的に習得するプロセスが不可欠なのです。温故知新の精神で、この教授法を進化させることは不

可能ではないと思いますが、いかがでしょうか。

一神話⑧：「日本人英語学習者は英語の発音はネイティブのようにはできない」

スウェーデンの人たちの話す英語を聞くと、英語の母語話者と変わらない流暢さと発音の自然さに驚かされます。一方、日本人の英語は、かなり流暢な人でも日本語のアクセントが色濃く残っていることがしばしばあります。確かに、スウェーデン語と英語のように、言語的な距離が近い場合には、言語習得も効率的に進むのに対して、日英語のように異質な言語の場合には、とりわけ発音面での習得に困難を伴うことは事実でしょう。特に中学校以降に英語の習得を始めた場合には、発音面で苦勞する学習者が少なくありません。しかし、そうかと言って、日本人がN.S. のようにとまでは言わなくても、それなりに自然な英語の発音を身につけることは教授法の工夫と学習者の努力次第で可能であることも確かです。英語音声学の基礎とまでは言いませんが、英語の単音の発音の仕方、リズムやイントネーションに特化した指導の工夫が望まれるところです。

一神話⑨：「留学しさえすれば、英語は楽に習得できる」

私が初めて海外留学をしたのは、1972年のことでした。その当時は、アメリカの大学で学ぶ日本人留学生の数も少なく、アメリカは遠い外国という存在でした。現在では日本人の留学生数が一時期と比較して減少しているとはいえ、1972年のころと比較すれば圧倒的多数の日本人が留学の機会を得ているものと思います。高校生や大学生で英語圏に留学する人たちの多くが、英語習得を目的にしているのですが、果たして留学すれば英語の習得が楽にできる、と言えるのでしょうか。若い時代に長期間(少なくとも1～2年程度の期間)、英語圏での生活を体験することは確かですが、だからといって「楽に英語の習得ができる」とは言えません。長期に渡って英語圏での生活経験を持つ帰国子女の場合でも、流暢に英語を話す反面、的確な英文を書く能力を身につけていない学生が、少なからず存在しているというのが実情なのです。長期間の英語圏での生活は、必ずしもバランスのよい英語習得を保証しない、と言えます。

留学は現在の若者にとって比較的实现可能な夢かもしれませんが、英語運用能力を身につけるには、それなりの努力が必要なことは言うまでもありません。

一神話⑩：「英語母語話者に聞けば、何が正しい用法なのか、すぐに判断できる」

英語の語法などについて判断に迷ったとき、N.S. の意見を聞いてみることは、英語教師ならば、誰でも経験のあることでしょう。斯く言う私も、教科書の執筆・編集にあたっては、N.S. との協同作業の際に彼らの意見を求めることは、しばしばあります。しかしその際に、一人のN.S. の意見を鵜呑みにしないという姿勢が大切です。N.S. といっても、さまざまなバックグラウンドを持っていますから、同じ表現に対する語感が微妙に異なる場合もあります。N.S. のAさんがOKと言っても、同じN.S. のBさんは使わないという場合さえあります。英語にも、さまざまな「変種」が存在しているわけですから、N.S. の言語直観(linguistic intuition)もそれに応じて異なっている場合も少なくありません。したがって、的確な判断をするには、少なくとも複数の意見を聴取することが前提になります。

一神話⑪：「英語を習得すれば、グローバル人材としてのパスポートを得たのも同然だ」

以前は「国際化」という言葉が跋扈していましたが、今日ではそれに取って代わって「グローバル化」という言葉を耳にすることが多くなりました。確かに、インターネットによって世界はネットワーク化され、企業活動も国境を超えて地球規模に広がっています。「グローバル化」は、単なる言葉の綾ではなく、世界の現実の姿でもあります。そうした社会において、英語がもっとも重要な言語のひとつであることは、紛れもない事実ですが、「英語さえできれば」と考えるのは、「グローバル化」をあまりに即物的に捉えた見方ではないでしょうか。グローバル・スタンダードという合言葉の基に、すべてが金太郎飴のように均一化することは、世界の多様性を損なう方向に繋がるでしょう。環境における多様性(diversity)の重要性が認識されている現在、自然言語の多様性についても目を向ける必要があります。世界には数千の言語が話されているとされています。もちろん、私たちがこれらの言語のすべてを学ぶことはで

きませんが、少なくとも、英語以外の外国語についても、目を向けるだけの余裕を持ちたいものです。そうすることによって、日・英語という2言語の世界から解放され、さらに広い視野に立つことが可能になるでしょう。

一神話⑫：「英語はコミュニケーションのツールだ」

英語に限らず、「言語とはコミュニケーションのツールである」と、あたかも自明の真実であるかの如く言われることがあります。確かに言語はコミュニケーションの機能を果たすことも事実ですから、このような「言語道具観」には、真実の一端があると言えます。しかし、問題はそれから先にあります。つまり、「言語とはツール以外の何ものでもないのか?」という問が控えているのです。言語は、対人コミュニケーション以外にも、私たちを取り巻いている世界を構造化したり、私たちの心のなかの内的世界を理解可能なものにしたりする際にも、必要不可欠なものです。言語なくしては、そもそも人間理解の糸口を探ることさえ難しいと言ってもよいでしょう。その意味で、英語を学ぶことは、英語話者の世界の構造化の仕方を学ぶことに通じるだけではなく、英語話者の内的世界へと通じる糸口を提供してくれるものでもあります。「言語道具観」で割り切ってしまうには、言語はあまりにも豊かで、謎に満ちた存在です。とりわけ外国語としての英語学習の意味も、「言語道具観」を超えたところにこそ、その奥深い意味が隠されていると思われるのですが、いかがでしょうか。外国語として英語を苦勞して身につける努力は、言語という人類最大の発明について、驚異の感覚(sense of wonder)を抱かせることに通じるかもしれません。

おわりに

以上、英語教育を取り巻くいろいろな「神話」について、思いつくままに取り上げ、私見を述べてきました。英語教育に携わるものとして、私たちが知らず知らずのうちに作り上げてきた神話について、もう一度、冷静かつ批判的に検証していく必要があるのではないのでしょうか。そうすることによって、浮き足立っているように思われる日本の英語教育を、地に足のついたものにするのできるのではないのでしょうか。